

岐阜県東濃地方、恵那市南部の明智・串原地域に通い始めて30年が過ぎました。私の第2のふるさとです。きっかけは、「ヘボ」。クロスズメバチという蜂の方言です。この蜂の子を山野で採って採り、巣箱で育て、ごちそうとして食べる文化がこの地方にあります。これに関心をもったのがきっかけで地理学の仕事につきました。串原は「ヘボ祭」で知られ、名物ヘボ飯、ヘボ五平餅が人気です。海上には刺されることがあってもおおぜいの人々が集まり、海外からの訪問客も増えています。

串原の山の上にあるハム工房「ゴーバル」。ネパール語で「牛糞」です。山形からネパール生活を経て仕事をしたいと2組の夫婦がこの村に人づてにやってきて、村の豚を使って小さなハム工房が始まりました。ここには地元の人だけでなく各地から若者も集ってきました。その一人りょう君が、アコースティック音楽バンドを作りました。だれもがいっしょに演奏できるシンプルで陽気なメロディとノリ、楽しさに中にちょっぴり切なさも感じられる詞、「マウンテンマウンテンズ」です。りょう君とあやのさんを中心に活動中です。私もそのメンバー。バンジョーやマンドリンで参加しています。

あやのさんは昨年、子どもの頃からの夢だったカフェを明知鉄道の小さな無人駅、野志駅そばにひらきました。地元のおじいちゃん、おばあちゃんにも愛されている手造り料理のすてきなお店です。駅を出発して急勾配を上っていくディーゼルカーも窓から眺めることができます。

野志駅となり、明知鉄道の終点明智駅は養蚕で栄えた大正時代の面影を各所に残した町で「大正村」として観光地になっています。その中心の「大正村浪漫館」の館長中村みはるさんは地域おこしに奮闘する大のアイデア・レディです。

こんな地域と人々をモチーフに、60×27cmの小さなNゲージ・ジオラマを作りました。

■あやのさんのカフェ「クラシア」を中心に、山の上のハム工房と大正村をむすぶ鉄道をモウソウしました。カフェのすき間に置けるよう、小さく、そして、時折走らせ遊んでもらえるように8の字エンドレスに2本の線路を出し、それぞれの端に駅を設けました。

■山の上のハム工房の名前は「KIIBAO」。松本駅も兼ねています。ラオ語で「フンコロガシの糞玉」です。私の研究対象の一つです。ネパールで燃料、壁、肥料などさまざまに役立つ牛糞と同じく、水田を養い、幼虫はごちそうに、何も無いようにみえる乾ききった水田の地下で育っています。

小さな小屋の工房はゴーバルの始まりであり、将来の夢でもあります。冬ならではの生ハム作りによりょう君がいそしんでいます。フランスバス地方の養豚にならった栗を食べて育つ豚は、ヤギとともに雪の中でも元気です。串原林業の大輔君も近くの山で伐採作業中です。

■急勾配の「綾野駅」。カフェ「クラシア」はあやのさんの店そのままです。広場では「マウンテンマウンテンズ」のライブスタート！

■大正村の駅は「みはる」。江戸時代から続く老舗と製糸業で栄えた大正時代の栄華が混在しています。小さな祠の「蚕霊社」はお蚕様が、峠に祀られた「糸引き乙女地蔵」に往時の産業が偲ばれます。

■当地の名物「ヘボ」（蜂の子）は屋台でも浪漫館でも絶賛売り出し中です。外国人もはるばる訪ねてきます。昨年の朝ドラはこの地方が舞台でした。それにあやかした商品も人気です。みはるさんのオリジナル宣伝ポップが注目されています。

■■町外れの小さなパン屋さん、明知鉄道沿線の岩村郊外にある薪窯パン屋さんがモデルです。ママテツ末永さんの手造りの建物です。

■小さなジオラマの中に四季を入れ込みました。これはママテツ菅原さんのアイデア。串原の新名所、しだれ花桃、田植え、ヘボ採り、雪景色など、四季を通じて魅力ある地域の様子を入れ込みました。

■中心にある澄んだ沼はママテツ須賀さんの池につながっています。串原でヘボ追いをやっているとき、山の中の小さなため池で、ヘビが大きなヒキガエルをくわえて泳いでいたのが記憶に残っています。沼のほとりに佇むのは、ディーキンさん。黒い人ですが、それ故にモウソウがふくらみます。『イギリスを泳ぎまくる』（亜紀書房）の著者です。水のあるところどこでも泳ぐ、水面から見える風景の細やかな雑草や風景世界の描写が魅力です。その近くには「行雲流水」と刻まれた墓石。この4月に建てた亡父の墓をその石（インパラブルー）を使って片隅に建てました。

■石仏群、郷の驛、獣害など当地のあれこれもいれこみました。



Mountain
Mountains









